

のについての記録は一つもない。一體此のイネ屬 (*Oryza*) は主として熱帯の産であつて歐洲を除く諸大陸には何れも多少づゝの野生種を有して居るがその内でアフリカは種類の数が最も多く ROSHEVITY によればイネ屬の分布中心地であらうとの事である。それに次いで種類の多いのは亞細亞洲であつてその内でも分布の最も廣いものは *Oryza sativa* LINN. 即ちイネで、現在イネと云つて居るものゝ内には可なり色々な型があるらしく事によつたらもつと細かく分けられるべきものかも知れぬ。

此の最も重要な作物であるイネ即ち *Oryza sativa* LINN. が本邦にも野生する事が判つたのは頗る愉快である。昨年臺灣に旅行した際に同地の西北部の低濕地にイネの野生種があるとの話しは聞いて居たのであつたが實見する機会がなくそのまま歸つてしまつた。その後、臺北市在住の島田彌市氏から新竹州で採集した標本を送つて頂いたのでそれが *Oryza sativa* LINN. の自生品である事が確められた。標本によると葉の細い多年草で穂は花つきが少なく、小花は内地の栽培品よりも細い、尙島田彌市氏によると小花は熟すると順次に脱落してしまふ由である。或は此の野生品が後日品種改良の上に何か貢獻する所があるかも知れぬとも思はれるので本誌の餘白を借りて報告する事にした。終りに臺北、島田彌市氏の御厚意に厚く感謝する。

Aquilegia akitensis Huth はヲダマキなり

大井次三郎

ミヤマヲダマキに此の學名を用ひるのは本當ではない、此の *A. akitensis* HUTH. は故 U. FAURIE 氏が秋田で栽培して居るものを採集したのが原標本である。これは本邦で廣く栽培されて居るヲダマキ即ち *A. flabellata* SIEB. et ZUCC. なる學名を有するものに外ならぬ、それでミヤマヲダマキはヲダマキの原種と考へて

Aquilegia flabellata SIEB. et ZUCC. var. *pumila* (HUTH) OHWI = *A. Buergeriana* var. *pumila* HUTH in Bull. Herb. Boiss. 5 (1897) 1090 を採用するのが一番正鵠を得たものと考へる。*Aquilegia Fauriei* LÉV. et VAN. (1906) はミヤマヲダマキの學名ではあるがそれよりも前に同名異物があるから使ふ事が出来ぬ。

龍舌菜の學名に就て

北村四郎

植物研究雜誌 第七卷六號 (昭和六年四月三十日) 二百二十頁に 牧野富太郎博士は